

伝わる愛

“動物”をテーマに活躍する団体に
スポットを当ててみました。

小さなリスがつくる、大きな輪

— NPO法人 町田リス園

1988年、市によって「小動物とふれあえる場所」を子どもたちに提供しようとして作られたのが町田リス園。伊豆大島のリス村から約400匹のリスを譲り受け、開園した。園の管理・運営はNPO法人が行っており、小動物とのふれあいの中で子どもたちの情操を育てる目的の他、障がい者のための働き場所にもなっている。現在は18人の障がい者がそれぞれ、役割を担い働いている。もちろん、その一人一人が個性を伸ばし気持ちよく働けるよう、環境は整えられている。「お客様対応がメインの仕事。人と接することが好きな障がい者にとっては、

良い環境だと思います。園としても、一人一人に合った仕事をしてもらい、楽しく仕事ができるように心がけています」、園長の入江繁子さんはそう語る。リス園ではまた、一般就労をしていない障がい者のために、「お仕事体験」でまずは仕事を体験してもらおうと、呼びかけも行っている。

リス園には市内のみならず、都心からも休日ともなれば朝一番から多くの親子が訪れる。平日は一般客以外にも市内の小学校の社会科見学や遠足にもよく利用され、またイベントとして5年前から定期的に行われている、「リスの巣箱作り大会」も親子に大人気だ。これは園が用意する材料を使い、子どもがデザインを考え、親が鋸の使い方

を子どもに教えながらリスがお家として使う巣箱を製作するもの。日曜大工が気軽に体験できることで親子のコミュニケーション作りに役立ち、また園にとっては消耗品である巣箱代のコスト削減に繋がるといって、相互メリットで成り立っている。園内は

数種のリスの他に、ウサギ、モルモット、カメラ等の珍しい小動物も展示。中でもやはり、一番の人気のコーナーは、約2500㎡の敷地内で約200匹のタイワンリスと直接ふれあえる「リスの放し飼い広場」だ。リスは人に慣れており、手の上や肩などに飛び乗ってくることもある。またエサをあげると、食べる様子がとてもかわいい。そんな行動には家のペットとは別の愛らしさを感じられ、こころ和むひとときとなるのだろう。



怖がらずフレンドリーに人に寄ってくるリスたち。子どもは大喜びだ。

問い合わせ

NPO法人 町田リス園 ☎042-734-1001
URL <http://www13.ocn.ne.jp/~risuen/>



人気イベントである「リスの巣箱作り」大会の様子

立っている。園内は数種のリスの他に、ウサギ、モルモット、カメラ等の珍しい小動物も展示。中でもやはり、一番の人気のコーナーは、約2500㎡の敷地内で約200匹のタイワンリスと直接ふれあえる「リスの放し飼い広場」だ。リスは人に慣れており、手の上や肩などに飛び乗ってくることもある。またエサをあげると、食べる様子がとてもかわいい。そんな行動には家のペットとは別の愛らしさを感じられ、こころ和むひとときとなるのだろう。

「障がいがある人もない人も、みんなが気持ちよく働いていることが伝われば、お客さまにも楽しんでいただけたらと思います」。園長のそんな思いは、リスとのふれあいを楽しむ親子連れの笑顔に現れている。



スタッフの皆さん。向かって右端中段が園長の入江さん

動物から人へ、 人から動物へ、

ま/ち/だ × アクティブ!

人と犬との幸せな生活を応援

— NPO法人 日本福祉犬育成普及会

周知の通り、最近ではペットブームである。町田市でも各地域で、犬と散歩する姿を見かける。ところがこのブームにより飼った方がいいが、しつけがうまく出来ず、癒されるどころか逆にストレスになり手放すことになるケースが多いことも確か。人間と動物のコミュニケーションは思うほど簡単ではない。そんな人たちのために「犬のしつけ教室」を玉川学園で行っているのがNPO法人 日本福祉犬育成普及会（会長…坂倉美樹さん）である。



この日指導を行った、向かって右から遠藤鈴さん、山口美和子さん、大橋由利さん、瀧浦祐子さん



毎週金曜日に行われる「犬のしつけ教室」

会が設立されたのは12年前。「人間と犬との共生」をテーマに、当初は福祉犬、介助犬、聴導犬を育成する団体として立ち上げ訓練所を開設し活動していたが、人手不足他諸々の事情により方向性を変えることになる。その後は市内の小学校等で介助犬のデモンストレーションを行うなどの啓発活動を経て、介助犬が高齢になり続けることが出来なくなった今は、しつけ教室と、老人ホームへのセラピー犬慰問という、二つの活動に絞っている。玉川学園子ども広場での週に一度のしつけ教室は、周りが一軒家中心の住宅街だけに口コミですぐに盛況となった。またメンバー自らが、犬が騒いで飼い主が困っている様子を見かねて声をかけるケースもあったという。

メンバーに言わせると「愛情さえあれば、犬と人間はうまく共生出来るはず」、しかしその一方で「犬はただ可愛がるだけではいい子に育たない」のだそうだ。訓練士にしつけを委託する方法もあるが、訓練士の言うことは聞くようになつたとしても、家に戻ってきた時に飼い主がしつけを理解してい

ないと元に戻ってしまう。互いに幸せな生活を築いていくためにはやはり、努力を継続させることが重要なのである。取材の日を集まった10匹の犬はいずれもむやみに吠えることなく、実にしつけが行き届いていた。メンバーの強い思いはしっかりと浸透しているようだ。

もうひとつの活動である老人ホームの慰問について聞くと、「もつとたくさん慰問が出来たらそれだけお年寄りの方たちに元気をあげられるのに……」と皆口にする。慰問に適した犬に育てるのは簡単ではなく、また育てたとしてもその飼い主の都合と合わせなければならぬため、なかなか回数を増やすことが出来ないのだそうだ。この慰問は、癒しはもちろん「血圧が下がった」他、実質的な効果もあるという。犬を撫でることで、手が思うように動かない方にとってはリハビリにもなる。

メンバーはその他、ブームにより最近増えた、飼い主を失った犬の里親探しの手伝いも行っている。これはしつけより、はるかに労力を要する。犬への強い愛情が、すべてを支えているのである。



場所さえあれば玉川学園以外に出張もしてくれるとのこと

問い合わせ

NPO法人
日本福祉犬育成普及会
FAX:042-729-2506(事務局)

伝わる愛

野鳥は自然のバロメーター

かしの木山自然公園愛護会野鳥部

野鳥観察を趣味とする人は、野鳥を愛しているのだということは理解できる。しかし一般的な動物好きや昆虫好きな人の行動とは違い、野鳥に触れるわけでもなく、遠くから双眼鏡でただ見守り、鳴き声を聞いているだけ。果たして彼らは、どんな部分に魅せられているのだろうか。「鳥は主に視覚と聴覚で、コミュニケーションをとる。そのあたり、人間にすごく近いんです。表情をじつと眺めて、声を聞いて、例えば「この2羽の野鳥はきつとこんな関係で、こんな会話をしているんじゃないかな」なんて想像を巡らせることが楽しいし、さらには、思いがけない出会いが感動を呼ぶこともある」と、野鳥観察の魅力を語るのは、かしの木山自然公園愛護会、野鳥部部長の



毎年2月の観察会では、シジュウカラ用の巣箱清掃と巣材の調査を行っている。



カラフルで綺麗なジョウビタキ。冬場は街中にも生息しているようだ。

富岡浩一さんだ。

1988年に開園した「かしの木山自然公園」は、豊かな自然と、そこに生息する草木や虫、鳥などとふれ合うことができる、都会では今や希少な存在。土地区画整理や宅地造成、大規模建設が進み、町田の自然が失われていくことを憂う人たちの手で結

成された「緑を守る市民の会」が市と一体になって取り組み、作った公園である。同時に公園の自然を守り、次世代へと引き継いでいくことを目的に「かしの木山自然公園愛護会」の活動もスタートした。樹木・野草部会、昆虫部会、工作部会とテーマ別に分かれそれぞれ保護活動を行っている。

野鳥部会では年に4〜5回の観察会を行っており、毎回多くの人が参加する。野鳥に精通する部会のスタッフがガイドとな

り園内を巡り、双眼鏡で野鳥を観察し、説明をするというのが主なコース。開園からここまで、100回以上の実施という歴史を誇っている。時折かしの木山に生息していないはずの野鳥が見られることもあるが、それは渡り鳥が旅の途中で立ち寄ったもの。これにより季節が感じられることも、野鳥観察ならではの趣なのだろう。何度も足を運ぶ参加者が多く、現在22名のスタッフもその多くが、観察会をきっかけとして入会したというのも頷ける。

部会スタッフは観察会とは別に月に一度、保護活動を行っている。野鳥の生息状況を調査したり、生息に必要な樹木や、ヤブ、草地や水浴び場の状況確認などが主な活動内容となる。「野鳥は自然度を表すバロメーター」だと言われている。野鳥を守るといことは、自然そのものを守ること



野鳥部のメンバー。左端が富岡さん

動物愛護のネットワーク

町田動物愛護の会

「無責任に野良猫にエサを与える人がいて、近所にたくさん住みついてしまい困っている」、「諸事情でペットを飼えなくなり、引き取る人がいなくて困っている」、「隣の家の犬が吠えかかって、子どもが怖がっている」などの悩みや相談が時折、市役所に届く。しかし市役所に動物の専門家がいないわけではなく、対処できないことも多い。また飼い主のいない犬猫を保護しても病気がかかっている場合などは、治療しなければ引き取りは頼めない。このような背景から市の環境保全課と東京都獣医師会町田支部、および動物愛護活動を行っている6つの市民団体により、「町田動物愛護の会」というネットワークが結成された。環境保全課が市民との窓口を担い、相談の内容により獣医師会と6団体が得意分野を活かし協力しあい、解決にあたるという、実に効率的なシステムが構築されているのである。



南成瀬の上田さんに譲渡されたさくらちゃん

会の代表をつとめる獣医師の大室農夫さんは言う。「ネットワークを組むことで市民の幅広い相談に応えることができ、隔々までケアできるようになったと思います。またそれぞれが普段違う活動をしている中から情報を持ち寄ることで、今後起こりえる問題を事前に把握することもできる」。

捨て犬を保護し、病気を治した上で里親を探す。この一例を考えても、ネットワーク内で一括して行えるというのは大きなメリットである。市民からの直接的な依頼以外にも、保健所や動物愛護センターから犬



定例会議に集まったメンバー。下段・中央が大室さん。
参加団体：東京都獣医師会町田支部、NPO法人日本福祉犬育成普及会、NPO法人フレンズオヴアニマルズ(FOA)、小さな命を守る会、動物を考えるタマの会、ボーダーコリーレスキューネットワーク(BCRN)、エンジェルズスタイル



毎年行われるイベント「まちだ動物愛護のつどい」

問い合わせ
町田動物愛護の会
☎090-9203-7172(事務局・館田)

猫を保護、譲渡する活動をしている団体もメンバーに参加している。
人間と動物との幸せな共生を実現するためのキャンペーンも定期的に行っている。「わんわんクリーンキャンペーン」は、路上などに放置されている犬の糞拾い作業。これにはその地域の町内会・自治会ら団体も積極的に参加するようになり、効果が上がっている。また「里親キャンペーン」として、動物と飼い主候補とのお見合いを定期的に実施している。
ペット問題に関しては風潮を考えれば今後、「飼い主が老人ホームに入ることになりペットだけが残される。離婚した夫婦が互いにペットを引き取れない状況になる」など、増えていくことが予想される。飼い主のマナー欠如という側面もあるものの、「我々の活動はこれからも必要だ」と、メンバーは口を揃える。各々が動物に関するスペシャリストであることの責任感から、というわけではなく活動の源は「動物愛護」。ネットワークによりその「愛」はパワーを増した。